

未来

「みらい未来」

呼ばれたので、答える。呼ばれることは分っていた。どんな用件かも。未来という名は、随分、皮肉だと思う。私の名前を考える時、両親は、どんなに悩んだ事だろう。或は、あるい、パッと辞書を披いて決めたのかもしれない。私には、分らない。想像することしかできない。

「はい」

央伍君おうごに、答える。央伍君おうごは緊張した、真剣な、顔をしている。かわいい顔。ずっと思おもい絵描えがいて来た。愛あいしいと思おもった。いつも戯かざけてばっかりの彼が、初めて、私に見せた態度。私は応えたくて、言おうとしたけど、喉のどが震えてうまく喋しゃべれなかった。

「好きです」

央伍君おうごは言う。映像がぼやけて重なる。嬉しい。有難ありがとう。言葉は震えて分解される。涙が出て来た。しゃくり上げてしゃべれない。頭が熱くなって、ぼうつとして、倒れそうに思おもう。「大丈夫か」央伍君おうごが支えてくれた。

意識が空に舞う。こんなに男の人が近くに
いることは、二度とない。私はゆっくり、「大
丈夫」と言って離れた。呼吸を整える。大丈
夫。口に出した言葉を、頭の中でくり返す。
大丈夫。涙が出るけど大丈夫。

「ごめんなさい」

断^{こと}わりの文句を何度も思い出す。言ったそ
ばから流れていった。もういまは、なんと続
けたのか思い出せない。央^{おうご}伍君の表情も、い
まはもう思い出せない。

涙を枕に押しつけて、どれぐらい経ったか
わからない。涙に暮れることは、分^{わか}っていた。

しかし、気もちに一段落がつくと、なぜ泣いていたのか思い出せない。自分がこの先これ程泣くことは二度とない。頬の皮膚が一度濡れて乾燥した引き攣る様な感覚を抱えながら、机へ向った。昨日書いた日記を目繰る。

×月○日 央伍君に告白される日！ 本

当に嬉しい。央伍君、かわいい顔してる。

呼び出すのが、校舎の裏って、まんがとかみたい。今からドキドキして、やまない。

恥ずかしくて、心地いい。

読んで心臓が跳ね回るほど驚ろいた。私が、

央伍君に、告白された？ 状況が理解できない。夫りやあ好きだけど、あれ、でも、好きなのは私で、もう少し先じゃないの？ 混乱して何を思っているのか分らない。嬉しさと、困惑で、一杯になる。そうか、告白されたんだ、あれ、でも、困る。どうしたら、いいんだろう。日記の続きを読む。

でも、私、断わるんだ。そっか、しようが、ないのかな。嫌だよ嫌だけど、しようがないもんね。怖い。

私には過去が分らない。みんながいう所の、

「記憶」が私にはない。私には未来が見える。自分にこの先何があつて、どうやって死ぬのかまでの未来が。愛里は「怖くないの」と言つた。「私、自分が死ぬなんて想像もできないよ。今高校生で、平均的な寿命で言つたらまだ何十年も何十年もある訳でしょ。正直自分は死なないって気がしてるもん」愛里は冗談を言つた時の様に、笑つた。冗談なのか、本気なのか、分らない。私には彼女の感覚が分らない。記憶があるというのは、過去が見えるということとは、平生生きていく上でどのような感情を起させるものなのだろうか。私は言つた。

「小さな頃から死ぬ時のこと知ってる筈だからね、慣れちゃってるんじゃないかな。怖いっていうか、しょうがないって感じなのかな」

日記にはその時のやり取りが詳細に記してある。私には、其日そのあった出来事を思い返して綴つづることが出来ないので、明日のことを書く様ようにしている。明日何があるか。過去があっても記憶のない私は、この日記や、友人の話を手懸よすがに過去を知る事しか出来ない。

断わった事を知ったら涙が出て来た。目尻を押えたら、濡れた跡があって、自分が泣いていた事を知る。たまらなくなつて日記を破

ろうとした。破いてぐちゃぐちゃにして踏み付けてもう二度と知ることのないように。心で悲鳴を上げた。破ろうとして、結局自分が破れないことを知っているので、虚しい憤いきじおろしい気もちで乱暴に机に叩き付ける。

「きのうテレビ見た」

「見た見た。超かっこよかったよね」

学校でそんな声をきく。私が今日見るテレビの話しなら、できるのになあ。そんなことを思う。もしかして同じことをもう何度も思ったのだろうか。みんなは、面白かったテレビや映画を、何度も思い出して味あじわうのだろ

うか。考えていると声が掛る。

「未来」

金子君だった。顔を上げると、央伍君もいる。央伍君！頭に血が上って、クラクラする。これが好きっていう気もちだろうか。まともに顔が見れない。

「明日大事な一戦があるんだよ。おれの競馬人生が懸ってるんだ。な、頼むから、なにが勝つのか教えてくれ」

「だめ」恥しきから大仰に外方を向く。「私は私の興味あることしか分らないんだから。

競馬の結果なんて今日も明日も目にしません。代わりに、今日のニュースなら教えて上げ

るよ」

「それじゃあ意味ないんだよなあ」

金子君は大きな声を出した。大袈裟な身振りに、笑いが起る。私も笑ったが、央伍君は笑っていないかった。「どうしたの」声を掛けると、強張こわばった、怖い顔をする。実際に目にするのととても怖くて、驚いて、心臓を握り締められる。どうしたんだろう、私、何かした？

考える間もなく、「悪い」というと教室を出て行った。

金子君が息を吐いた。愛里あいりが「ねえ」と私に言う。言おうとしてやめるので、不安になる。「私、何かした？」愛里あいりは首を振った。

「しようがないことだよ」

声には諦^{あきら}らめの調子が籠^{こも}っていた。家に帰ったら、日記を見てみようと思う。でも、見たって、其^{その}内容を覚えていられない。愛^{あい}里^りがなにか言いたそうな、悲しい顔をしているのも、すぐに忘れる。

金子君の隣りに、めずらしく央^{おう}伍^ご君がいない。

○月○日　いまは夏休み。いつから夏休みが始まったのかは分らないけど、いつ終^{おわ}るのかは分る。宿題をやる必要はないだろう。

明日は愛里と遊ぶ最後の日。私の記憶には、もう、明日を境に愛里が出て来ない。明日愛里と別れたら、私は愛里を忘れるだろう。愛里と何をしたのか、して来たのかは思い出せないけれど、愛里のことを好きって気もちは、嘘じゃない。気もちは、積み重ねられて来たものだと思える。でも、信じたことも、思い出せないんだろうなあ。

日記を読み返すと、愛里と出会う前日、めっちゃめっちゃ長く日記を書いていて笑う。興奮して、「明日は親友と出会う日！」だって。きつとずっと前から、愛里と出会う日を夢に見て、楽しみにしていたんだろう

なあ。「これからたくさん楽しいことが二人を待ってる」だって。絵とかも書いて、この頃は若かったなあって感じ。いまは、なんだか、おばあさんになった気分。

けんかした時のことも書いてある。「運命は切りひら開くものだよ！未来が決まってるって、そんなの、従したがうだけなんてつまんないじゃん。もっと自由に生きてよ！」読み返しても、意味が、よく掴めない。運命を切りひら開く。じゃあ、その、切りひら開くことも運命の一部なのだとしたら、どうなんだろう。一いっ體たいどう生きれば自由と号よべるのだろう。私には未来が見える。夫それは、抗あら拒がい

様のない、真実に思える。

楽しみなこともある。恐おそろしいこともある。でもそれはいつか辿たどり着く途みちだから、しようがない。楽しみなことがある。それだけで、私は、嬉しい。

明日の愛里あいりとのデートを、何度も思い返す。二人が笑って別れられるのが、しあわせで堪たまらない。愛里あいりの笑顔が、好き。愛里あいりのことが大好き。今までありがとう。本当に本当にありがとう。このありがたい気もちを、私は忘れるけど、今はここにある。私だけのもの。明日、全部渡すから、二人のものにしようね。

明るい未来が見える。楽しくて、胸が躍る。

服を選ぶ。着ていく服は分っているけど、どれを着ていこうか、悩む。この服かわいいからお気に入りに入り、これだと気合入りすぎ？ 部屋にはたくさん服が乱れていて、自分がどれほどの時間悩んでいたのか、知る。

時間が迫って来た。慌ててお気に入りの服を着る。よしかわいいぞと思いつけて、それは調子に乗り過ぎかなと思う。でも、悪い。化粧を、ふるえる手で丁寧に、髪を調^{ととの}える。心臓が、踊^やって歇^やまない。怖い。

でも嬉しい。今日は央^{おう}伍^ご君に会える。街で、

偶然にだけれど、私は其偶然を知ってる。

出掛た。CDショップや、服屋を、見て回

るけれど身が入らない。お腹は減ってない。

きつと、家で済して来たのだろう。ハミガキ

は、大丈夫だろうな。いい匂いのするガムを

食べる。央伍君に会う直前で、ちゃんと捨て

るから、大丈夫。大丈夫、大丈夫。自分に言

い聞せる。ドキドキが止らない。これからの

ことを思い出し、想像する。身悶えるよう

な恥しさに襲われる。想像するのは、すて

きなこと。没頭していると、幸せでいられる。

ガムを紙にくるんで、ゴミ箱に捨てた。一、

二、三と、自分の一歩々々を数える。もうす

ぐ、もうすぐ彼に出会う。にやける顔を、咳
払いする佯ふりで、隠す。なるべく、いい顔をし
ていなくっちゃ。自分の記憶では、自分の顔
は分らない。ただ景色だけが見える。央伍君。
私の世界が央伍君おうごだけで染まる。世界と、現
実が、少しずつ重なる。人込ひとごみの中に、央伍君
の姿が、見えた。

「央伍君！」

大声で叫んだ。自分がこうすることは分っ
ていた。でも、こんなに恥はずかしいとは思わな
くって、頭に血のぼが上った。央伍君おうご以外の人ま
でこつちを見る。私は周りにペコペコ頭を下
げながら、赧てれ隠しに笑った。

「今何するところ？」

央伍君も恥はずかしそうにポリポリと鼻を搔いた。「買い物だよ」目を合せずに言う仕草が、可愛い。

「久しぶりだな」

央伍君は「夏休み始まってから会ってないな」と続けた。私はエヘへと笑う。央伍君がそう言うから、そうなのだろう。何をやってるんだ私。腑甲斐ふがなさに、憤りを感じる。

「未来みらいは何をしてたんだ」言われて、きよろきよろする。袋を持っていた。「えーと、買い物？」袋を掲げて首を傾げる。「そうだったな」央伍君はゆっくり額突うなずいて応じた。

気付いたら二人で歩いていた。「あれ、どこ行くとところ」思わず聞いた。「川」央伍君は笑う。「それ三回目」私はしまったと思う。

「あ、申し訳ない」「いいんだ、笑ってごめん」央伍君は笑みを深める。何をやっているんだ私。でも、笑ってくれたから、いいかな。央伍君の笑顔に見惚れる。

ベンチに座って川を見る。この時が、永遠に続けばいいのにな。続かないことを、私は、知っている。「永遠ってあるのかな」私は独語く。メルヘンチックな子と思われなかなという狙いがないではない。「この世のどこかにさ」

「ないとは言えないよな。あるっていう証
明はないかも知れないけど、ないっていう証
明もないんだから、だれにも分らない。だっ
たら信じてみてもいいじゃんって、俺おれは思
うけど」

少なくとも、私に永遠は訪れない。

「お前は覚えてないかも知れないけど、球
技大会で、サッカーやったじゃん、クラス対
抗で。うちのクラス、サッカー部が揃ってる
二組に勝ってさ、すげえ盛り上あがってたんだよ。
こうなりや絶対優勝だって、みんな一つにな
ってた。でも、決勝で、PKになってさ、俺お
れが外した所為で、負けちゃったんだよな。俺お

れすげえ落ち込んだよ。みんなお前の所^せ為^いじやないって言ってくれたけど、どう考えたつて俺^おれが悪いじゃん。俺^おれ、いじけて、みんなの顔見てられなくて、校舎の裏に逃げ込んだよ。涙が出そうだった。そしたら、未来が、走って来てき、なんて言ったと思う？ 『央^お伍^ご君、未来を見ようよ！』だって。俺^おれ、自分がいじけて、うじうじ失敗に囚^{とら}われてるのが馬鹿々々しくなったよ。だから又すぐみんなのところ行って、もう一回ちゃんと謝って、みんな許してくれた。お前の御^お蔭^{かげ}なんだよ。俺^おれは馬鹿だから時々あのPKのこと思い出して未だに身悶えすることあるけど、そういう

時は、未来のこと、これからのこと考えるようにしてる。あ、だから、ごめんな。未来には本当に感謝してるんだよ。でもお前に失恋ふられてから、なんか気まずくって、女々しいっていうか、未練がましい様な気はするんだけど、どうしても顔見て話しできなくて……」

「え、一寸ちよつと、待って」耳を疑うたがった。「私に、失恋ふられてって、私が、央伍君おうごを、つまり……」

「失恋ふられた」央伍君おうごは頷うなず突いた。「って何で俺おれが説明しなきゃいけないんだよ。って言ってもしようがないのか、嗚乎あ、もう、はずかしい……」

「そんな訳ない」私は混乱して口走った。

「だって、私が、央伍君のこと」

「好き」

遠くで野球に興ずる少年達の声が響いた。

鳥が阿呆あほうの様な声で鳴く。川が夕焼けでオ

レンジに映える。私の顔にも映えていればい

いなと思う。飛とんでもない事をしていると思

う。情景は分つても、気もち迄までは、分らない。

想像するしかない。想像は、現実には、及ばな

い。劇烈に恥はずかしい。顔が真っ赤になってい

たらどうしよう。央伍君おうごが立って動いた。

立って、屈かがんで、座る私の目の前に来る。

かっこいい。夕陽ゆうひに染まると尚かっこいい。

口を披ひらいた。

「俺おれはお前まへが好きだ。自分が、特殊な状態うまで生なれても、卑屈うまにならずに、明るくて、優しい、未来のことが好きだ。お前まへのこと、守まもりたいと思う。だれか悪く言う奴やつとか、沢山のつらいこととかから、全部、俺おれが守まもりたいと思おもってる」

私の凡すべては奪うばわれた。明日死しぬことも、忘わすれた。私は領突うなずいていた。

二人で川浴いの道を帰かえった。控ひかえ目めにつないだ手が、温ぬかかった。沸騰ふっとうした頭に、しあわせの感触かんじ、夫それが私すべの凡すべてだ。

きっと生れた時から、死ぬ事が分っていた。

死生観なんて言葉を見ると、馬鹿らしく思った。死ぬ時のことが分らないから、そんな事を考えるのか、単に暇だから其んな事を考えるのか、疑がった。

死は事実だ。厳然たる真実だ。生命の始まりは生れた時だけれど、人間の思考は、死を基準に出立すべきだ。未来を見れば、死しかない。どんな経過を辿るかは問題ではない。

学び、働らき、食べ、寝る。一つ一つのこと
が死につながっている。今死なない、死ぬこと
のできない人間は、今、生きていくこと以外に、
生きる方法はない。

私は服を選んだ。ボタンを締める手に、力が入らない。出掛ける。メールを見返すと、差出人に「央伍君」と書いてあって、「今日ありがとうございます。本当に、本当にうれしい。こんなに明日が待ち遠しかったことってない」という内容が長々と書いてあった。携帯を閉じる。電車の震動に、人々のむれ。

どうしてここにいるんだろう。電車を降り、駅前の広場に立つと、そんな疑問が胸に萌した。今日、ここには、無表情な、気もちの悪い顔をした、兇刃を振り回す男がやって来る。私の知る限り、あの人と、あの子が、刺される。次は私だ。あの二人も、私と同じ、空虚

な、気もちなんだろう。女の子は電話をしな
がら楽し^げ気に喋^{しゃべ}舌^るる。

時計を見る。十時の三十分前だ。思つて、
なぜ、九時半だと思わなかつたんだろうと怪
しむ。わからない。携帯を披^{ひら}く。閉じる。無
意義な動作をくり返す。

どうしてここにいるんだろう。何の為に、生^{うま}
れて、来たんだろう。長い、長い、時間をす
ごす。時計を見る。十時には、まだ、まだ、
至らない。思つて、どうして、十時を基準に
しているんだろう、怪しむ。死ぬ為に生れて
来た。その為に、長い、長い時間？

手の中の、携帯電話が、震えて鳴った。同

時に、大きな、悲鳴が聞えた。人々が一斉にそつちを見る。逃げる人、立ち竦む人、分れる。人込の隙間に、見慣れた男が、現れる。

涙が迸った。嫌だ、怖い、助けて。手の中で、震える携帯電話が、感情を攪き乱す。助けて。逃げる、あの人が、背中を刺される。

あの子が、携帯を取り落して、腹を刺される。嫌だ、嫌だ、何の為に？ 目が合った。助けて。

イメージと、現実が、重なる。